小中野小

自分の考えをもち進んで伝え合う子どもの育成

（３年計画の２年次）
校長　花生　典幸

１　研究主題について

これまで本校では、国語科と算数科の授業を中心に「対話する場面」を意図的に設定し、１年間研究を進めてきた。また、対話のさせ方(発問、教材へのしかけ、対話をファシリテート)を工夫して指導を継続してきた。それにより、相手の話をじっくり聞こうとする児童が増え、相手の意見をしっかりと受け止め、共感しながら聞こうとする姿勢が多くみられるようになり、あわせて自分の考えと相手の考えを比較しながら聞くことができるようになってきた。また、相手の考えをしっかりと受け止め、その上で自分の思いや考えを相手にわかりやすく伝えようとする姿も多くみられるようになってきている。しかし、全体的に見ると、友達の話を集中して聞くことができなかったり、自分の考えをもっているものの、その考えをうまく相手に伝えたりすることができない子どもの割合も依然として多いことが分かった。

そこで、今年度は研究テーマと研究教科はそのままで、昨年度までの研究の成果を生かしながら、より「対話」に焦点を当て「対話のベース作り」「『対話する場面』の工夫」の２点を研究の中心とすることとした。話をよく聞き、進んで考えを伝えようとする子どもを積極的にほめ、互いの考えを尊重し、何でも言い合える学級の雰囲気づくりにも力を入れていく。その上で、教師が発問を工夫することにより、ただの意見交流で終わらず、子どもが必要感をもって対話ができるようになり、また、子どもたちが自分の力で問題解決ができるようにしていきたいと考えた。以上のようなことをもとに、自分の考えをもち進んで伝え合う子どもの育成に努めていきたい。

２　研究のねらい

自分の考えをもち､進んで伝え合う子どもを育成するための効果的な指導のあり方を、国語科と算数科の学習における授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

授業の中に｢対話する場面｣を意図的に設定し､対話のさせ方を工夫することにより、自分の考えをもち、進んで伝え合う子どもを育てることができる。

４　研究内容

(1) 対話のベース作り
　ア　話を聞こうとする姿勢の育成
　イ　進んで話そうとする意欲の喚起
　ウ　何でも言い合える学級の雰囲気づくり

(2)「対話する場面」の工夫
　ア　発問の工夫
　イ　教材へのしかけ、提示の仕方

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	研修内容・学年・授業者等
9	7	第１回授業研究（２学年）授業者　教諭　尾形　夏帆 国語「どうぶつ園のじゅうい」
9	２８	第２回授業研究（３学年）授業者　教諭　木村　裕莉愛 算数「あまりのあるわり算」
１１	１６	第３回授業研究（５学年）授業者　教諭　野里　さや香 国語「大造じいさんとガン」

(2) 一般研修

月	日	研修内容・講師・概要等
6	1	「一人一台端末の活用」についての事例発表 講師：本校職員
6	１５	「のびゆくちぐさの子」を活用しての児童理解の研修
8	３１	青森県学習状況調査採点と分析
１１	9	「特別支援の視点を活かした授業づくり」について 講師：立教大学現代心理学部　教授　大石　幸二

６　研究の成果

(1) 対話する場面を意図的に設定し、対話のさせ方を工夫したことにより、子ども同士の対話スキルに向上が見られた。また、対話しようとする意欲が高まり、全体の場で堂々と発表できる子が増えてきた。

(2) 問題を二択にし、立場をはっきりさせてから対話させたことで、対話に必要感が生まれ、深まりが見られた。また、問題にしかけを取り入れたり、発問を工夫したりすることにより、自分の考えをもち積極的に対話をする子が増えた。

７　研究の課題

(1) 積極的に対話をしようとする子と、なかなか勇気を出せずに対話に参加できない子の個人差が顕著に表れてきた。全員が自信をもって自分の考えを主張できるようになるために、日常の授業の中で自信をもてない子たちを大いにほめ、自信をもたせていく指導が必要である。また、対話の仕方について具体的に指導し、対話する力を確実に定着させていく必要がある。

(2) 教師がファシリテートしすぎてしまい、子どもが主体となる、子ども本位の対話にならないことが多かった。対話のねらいは、意見交流ではなく、課題解決であるということを全教職員でしっかりと共通理解し、子どもたちが考えを出し合い、話し合っていく中で自分たちなりの答えを導き出せるような対話のあり方をめざしていく必要がある。そのために、子どもたち同士で対話を進めることができるスキル（対話のつなぎ方、自分の考え方の述べ方など）を、日々の授業で継続して指導していく必要がある。

(記入者　佐々木　亮輔)